106 ユグノー戦争とフランス絶対王政

ユグノ一戦争 (1562~98) とは何だったのか

16世紀後半の内乱を経て絶対王政が確立する!

- 1) 百年戦争 1337-1453 後のフランスでは、国内のイギリス領もほぼ一掃され、国王の権力が強化されつつあった。同時に農民・手工業者・商人の間に【1: 】 (カルヴァン派) が増加し、一部の大貴族(=有力諸侯) や有力な商工業者の間にもユグノーが増加し、カトリックを背景とする王権と激しく対立していた。
- 2) アンリ2世位1547-59 はユグノーを弾圧した。シャルル9世位1560-74 が幼くして即位すると、その母カトリーヌ=ド=メディシス ※1 は、摂政として実権を握り、(次のアンリ3世位1574-89 の時も摂政)、当初、カトリックとユグノーの勢力均衡をはかったが失敗、カトリックのギーズ公(この人物の名もアンリ)と結んでユグノーを殺した。虐殺はサン=バルテルミ以前に始まっており、【2: 】 1562-98 の始期は1562年である。

※1 メディチ家出身 1519-89、アンリ 2 世の妃、フランソワ 2 世、シャルル 9 世、アンリ 3 世、マルグリットの母

- 3) ユグノー戦争10年目、1572年8月24日に悪名高い【3: 】と呼ばれる事件が起きる。 国王シャルル9世の妹マルグリットとユグノーの指導者であるブルボン家のアンリ(後のアンリ4世、同じアンリだがヴァロワ家ではなくブルボン家)との結婚を祝うためにパリに集まっていたユグノーを、カトリック教徒が襲撃し、死傷者多数を出した。アンリ自身は虐殺を免れたが幽閉され、脱出した。たいていの教科書には絵が載っている。これ以降、ユグノー戦争は激化しフランスは混乱した。スペインがカトリックを、イギリス・オランダがユグノーを支援して干渉した。商工業者のユグノーの中には虐殺を恐れ、イギリスなどに亡命する者もいた。
- 4) 以上からわかるように、ユグノー戦争とは、ユグノーとカトリック教徒の対立・紛争が深刻化し、これに王権をめぐる勢力争いがからんで大規模な内乱に発展したもので、外国勢力の干渉もあった。王権争いは3人のアンリに絞られた。 3人のアンリ・・・・アンリ(シャルル9世の弟、後のアンリ3世)・ギーズ公アンリ・ナヴァル王アンリ(後のアンリ4世)。
- 5) シャルル9世位1560-74の死で即位したアンリ3世位1574-89は、失政が多く人民の不評をかっていた。彼はカトリック教徒の支持を集めるギーズ公を暗殺したが、彼も修道僧に暗殺された。こうしてヴァロワ朝は断絶(カトリーヌ=ド=メディシスもその直前に病死)した。
- 6) 1589年、大混乱の中でユグノーの指導者、【4: 】 位1589-1610 が即位し、【5: 】 を開いた。彼はナヴァル王でユグノーの指導者だったが、カトリーヌ=ド=メディシス の画策でシャルル9 世の妹マルグリット 1553-1615 と結婚していた。即位後も内乱は続いた。そこで1593年、アンリ4世は、国民の多数が信じる【6: 】 に改宗した。そのうえで、1598年、「【7: 】」を発した。「ナントの王令(勅令)」はなんと、個人の信仰の自由を実質上認めるもので、これによってユグノーに信仰の自由を認めた(新旧両教徒にほぼ同等の権利を与えたので、新教徒であっても不利益はほぼないから)。ようやくユグノー戦争は終結した!

「アンリ4世、ナントの王令 以1後5悔9や8まず。」・・・これはゴロ合わせ。

彼はブルボン朝を開き、ユグノー戦争を終結させ、個人の信仰の自由を確認したが、彼もまた(国王としての仕事を存分にしてからであるが)カトリックの聖職者によって暗殺された。いやはや暗殺の多い時代である。また、ナントの王令は1685年、ルイ14世によって廃止されたことも覚えておこう。なお、マルグリットはアンリ4世と不仲で1599年に正式に離婚(1615年没)。1600年、アンリ4世は、ほぼ莫大な持参金目当てにマルグリットの母方の遠縁であるメディチ家のマリー=ド=メディシスと再婚し、その間に生まれた子がルイ13世である。マリーはアンリ4世が暗殺(1610)された後、ルイ13世の摂政として王政を担ったが、1631年失脚した。

7) そして、これが肝心である。ユグノー戦争は何を残したか?

ナントの王令で平和がもどったフランスでは、戦いに疲弊した大貴族は抑えられ※2、王権が一段と強化された。宗教対立 も緩和された。アンリ4世は中小貴族を官僚として登用し、財務総監シュリ1559-1641のもとで国家経済の再建が行われ、 絶対王政の基礎が築かれた。フランスはようやく統一された国家として、フランス人も「ひとつの国民」としてまとまる 方向に一歩を踏み出したのである。また、旧教国であり続けたが、ローマ教皇に対してフランスの教会の独立性を主張す る立場が強まった。 ※2 フランス最後の貴族反乱は、ルイ14世幼少期のフロンドの乱1648-53である(後述)

ルイ13世時代=フランス絶対王政の確立期

ブルボン朝の初代、アンリ4世の子【8:

】1601生、位1610-43は、フランスの絶対王政を確立した!

アンリ4世が暗殺され、ルイ13世は幼少で即位、宰相【9:

】任1624-42 など有能な部下たちが補佐した。

1) 三部会を開かず! 1614年に招集、1615年に解散(招集停止)して以来ずっと招集せず。

ルイ13世は1615年当時14歳だった(リシュリューも登用前)。三部会は、諮問機関としての役割低下と絶対王政の成立により不必要となり、後代の国王、宰相も招集することはなく、次に招集されたのは174年後の1789年(フランス革命前夜)であった。

- 2) 宰相にリシュリュー 任1624-42 を登用したのは1624年。以下はそ**の仕事**
 - ①大貴族の勢力をおさえ込み、ユグノーの政治力を削ぎ、**王権の絶対化**につとめた。ナントの王令がありながら、実際には ユグノーを弾圧した。この仕事はルイ14世の宰相**マザラン** 任1642-61 に引き継がれた。
 - ②1635年、アカデミー=フランセーズを創設。
 - ③三十年戦争に積極的に介入した。目的はハプスブルク家打倒!
 - ④財政改革を行った。

ルイ14世時代・・・・フランス絶対王政の最盛期

太陽王 【10:

】位1643-1715 時代はフランス絶対王政の

最盛期である。

以下に幼少期と親政期に分けて説明しよう。

絶対君主を支えた賢臣

ルイ13世 宰相リシュリュー

ルイ14世 宰相マザラン

財務総監コルベール

ルイ14世(幼少期)

- 1) ルイ14世 位1643-1715 も幼少で即位、宰相【11: 】 任1642-61 ※3 が補佐していた時期に、貴族の反乱=【12: 】 1648-53 が起きるが、有能な部下たちがこれを鎮圧した!
- 2) フロンドの乱は、パリの高等法院から始まり全国に波及。古くからの貴族と新興の貴族となった法律家たちが王権の強化 (中央集権化による特権剥奪・慣行破壊)に抵抗しておこした激しい反乱である。ルイ14世は一時パリから避難したほど 深刻なものだったが、王権によって鎮圧され、貴族の弱体化=王権の強化を見たので**フランス最後の貴族反乱**とされてい る。「17世紀の危機」の現れの一つと見ることもできる。

※3 マザランは、リシュリューの後任者でその政策を引き継いだ。

3) 1648年、ウェストファリア条約で、アルザスの領有権を獲得。

ルイ14世 (親政期)

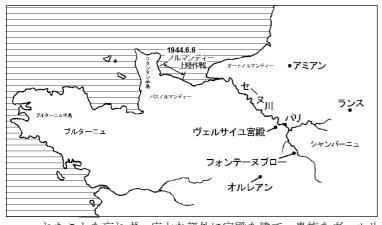
1661年以降、ルイ14世は親政(自分自身で政治)を行うようになった。ヨーロッパ最大の常備軍を擁する絵に描いたような絶対君主となり、太陽王と言われ、自らも「**朕は国家なり**」と言った(伝)。以下は親政期の業績である。

1) 1665年、財務総監に【13: 】 任1665-83 を起用、典型的な【14: 】 政策を行う。コルベール主義ともいう。なお、財務総監と財務長官の権限はほぼ同じ。外国人は財務長官しかできない(ルイ16世が登用したネッケル)。 別項で詳述するが、一般に重商主義とは、≪貿易による貨幣の獲得を重視し、富を増やそうとする政策≫のことである。国家による貿易の独占や、輸出品を生産する産業の育成、保護貿易(輸出を奨励し、輸入品には高い関税を課し

て、輸入の増大を抑制する)を特徴とし、商工業の育成と王権の財政基盤の確立を主目標とする。

コルベールは、これに加えて、①王立マニュファクチュアの育成、②造船や海運の奨励等を行い**オランダの商業覇権に挑** 戦した。

- 3) パリの南西22キロの郊外イヴリーヌ県ヴェルサイユに【16: 】 を建設した。1682年、莫大な建築費と20年の歳月を要して完成、ヨーロッパの宮廷文化の中心となった!バロック建築の代表作で、豪華な建物と広大な美しい庭園で有名であり、フランス絶対王政の象徴的建造物とされ、実際、王族と、その臣下が居住し絶対王政はここで行われた。「鏡の間」は、1871年、普仏戦争最終盤のパリ攻囲戦の最中にドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の即位式(ドイツ帝国の成立)が行われ、また第一次世界大戦後の対ドイツとの講和条約であるヴェルサイユ条約が調印された場所としても有名である。



- ①噴水庭園だが、近くに水源となる高地はない。10km も離れたセーヌ川の川岸に巨大な機械を設置し、堤の上に水を上げさせ、古代ローマさながらに水道橋を作って、水をヴェルサイユに送り巨大な貯水槽に溜め込んで噴水を可能にした。
- ②世界中の宮殿に模倣された。北京郊外の円明園はバロック式と中国様式の融合したもの。1860年、英仏軍により破壊された。
- ③毎晩のように開かれていた晩餐会における席次・テーブルマナーはここで作られ、フランス料理と共に世界中に広まった。
- ④当時の民衆も庭園を見学することができ、順路や案内書まで用意されていた。
- ⑤ルイ14世は狭く建て込んだパリの宮殿で育ち、10 歳の時のフロンドの乱の際に貴族たちに命を脅かさ

れたことを忘れず、広大な郊外に宮殿を建て、貴族をヴェルサイユに強制移住させた。

- ⑥ヴェルサイユ宮殿には王族用以外のトイレがなかった。
- ⑦上空から見ると庭園の一部がミッキーマウスの顔と酷似していると言われている。なお、上空は飛行禁止。
- 4) 【17: 】 を廃止(1685) して**ユグノーを弾圧! ・・・・**商工業を支えていた**ユグノーがプロイセン、イギリス、オランダなど新教国に多数亡命**したため、経済的ダメージは大きく「17世紀の危機」を脱するのに時間がかかった!
- 5) ヨーロッパと海外に於ける覇権をめざし、**自然国境説**を唱えて、**侵略戦争**を繰り返し**財政窮乏**を招いた。 ルイ14世に関連した諸戦争は、別項にまとめた。

2004センター試験 空欄 アーと イーに入れる語の組合せとして正しいものを選べ。

・・・・・アンリ3世の暗殺で「ア」朝が絶えると、1589年ブルボン家のアンリがアンリ4世としてブルボン朝を興した。新教徒のアンリ4世は旧教に改宗することでこの宗教的対立の解決を図った。・・・・さらに1598年の「イ」で新教徒にも大幅な信教の自由を与えるなどして、ブルボン朝の基礎を築いた。

① ア カペー イ ナントの勅令

- ② ア カペー イ アウグスブルクの和議
- ③ ア ヴァロワ イ ナントの勅令 ④ ア ヴァロワ イ アウグスブルクの和議

2009早稲田大学 商 問 17世紀フランスで起こったことの説明で誤っているものはどれか。

- ① 宰相リシュリューはルイ13世を補佐し、フランスの国際的威信を高めた。
- ② 宰相マザランは幼いルイ14世を補佐し、絶対王政の強化に貢献した。
- ③ 財政総監コルベールは重商主義政策を進め、マニュファクチュアの保護に努めた。
- ④ ナントの王令(勅令)の廃止によって、フランスの商工業は一層の発展をみた。

正解 ④

正解 ③